

私が見つけた魅力を語ろう
～自ら問いを立て、描写を基に作品を解釈する活動を通して～

山梨大学教育学部附属中学校

授業者 山本 祐太郎

【キーワード】「文学作品の読み」「問いを立てる」「学びの計画書」「学びの履歴書」

【授業の概要】

本単元では、自ら問いを立て、それを解決する中で自分が見つけた作品の魅力を学級の仲間と語り合う活動を行う。この活動を通して、生徒は情景の細かな描写や心情を表す豊かな描写が作品の魅力に迫る解釈につながっていくことについて気付いていく。また、自分の解釈の根拠を考えたり、他の読み手の解釈と比較したりすることで、作品の読みを深めることにつながっていくと考える。

1 単元の目標

(1) 比較や分類、関係付けなどの情報の整理の仕方、引用の仕方や出典の出し方について理解を深め、それらを使うことができる。

〔知識及び技能〕(2)イ

(2) 目的に応じて必要な情報に着目して要約したり、場面と場面、場面と描写などを結び付けたりして、内容を解釈することができる。

〔思考力、判断力、表現力〕C(1)ウ

(3) 文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考えることができる。

〔思考力、判断力、表現力〕C(1)エ

(4) 言葉がもつ価値に気付くとともに、進んで読書をし、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。

「学びに向かう力、人間性等」

【言語活動例 中1】

Cイ 小説や随筆などを読み、考えたことを記録したり伝え合ったりする活動。

2 教材名 安東みきえ「星の花が降るころに」(光村図書出版「国語1」)

3 生徒の実態

生徒は、国語の授業に対して意欲的であり、発言や交流も活発に行う生徒が多い。毎時間の振り返りも丁寧に記入し、自身の活動を振り返ったり、次の活動に生かそうとしたりする様子が見られる。本校が目指す自立した学習者として、自ら疑問をもって取り組んでいる状況はあるが、協働的に解決を図る点にまだ課題がある。主体的に学びに向かう姿勢を育むためにも、自立が一人だけでなく、協働的に解決を図ることで成立していくものであるということを自覚させてい

くことが必要であると考え。

本年度の５月に行われたNRT検査(表１)では、国語の全領域で全国平均は上回っているが、読むことの領域を見てみると、「主題や構成を読み取る」と「考えや感想をまとめ伝え合う」ことの項目が全国の正答率と同様に低い。このことから、文章の内容解釈にやや課題が見られると考えた。

これまでの「読むこと」の指導においては、描写を基に心情の変化を捉える活動を行ってきた。一つひとつの描写については登場人物の心情と重ね合わせて読むことができるようになってきたが、場面を越えて登場する描写を結び付けて解釈することに課題があると考えた。

そこで、「星の花が降るころに」では、複数の場面や描写を結び付けながら作品の解釈ができるようにしていきたい。場面や描写から直接分かることを把握するだけでは、新たな意味付けはできない。例えば、この作品は最初の場面と最後の場面を結び付けて考えることで、「銀木犀」が「閉じ込められる木」から「くぐって出ていく木」になることが読み取れる。そこから、「私」が「夏実」への執着から解放されたことや「銀木犀」を出ていくきっかけになった「戸部君」や「おばさん」の存在に気付くことで、作品の読みが深まっていくと考える。

	読むこと領域 集計	正答率 学年	正答率 全国	全国比
1	主題や構成を読み取る	71.7	46.3	159
2	要点をとらえ内容を解釈する	74.9	54.8	134
3	考えや感想をまとめ伝え合う	70.0	48.7	147

NRT標準学力検査結果から(表１)２０２５年５月実施

【日常の取り組み】

○「学びの計画書」の取り組み

「学びの計画書」はこの単元で身に付けるべき力を生徒自身が認識し、その目標の達成のためにはどのような学習過程を経て、どのような方法で学習を進めていけばいいのかを自身でデザインするための計画書である。これを作成することによって、目標の達成のためにどのような手立てが必要なのかが明確になる。さらに仲間の計画書や考えをICTで絶えず交流することにより、自身が必要な時に必要な自己調整が加えられ、より主体的な学習が可能になると考える。

○「学びの履歴書」の取り組み

これまでの学びを振り返り、これからの学びにつなげるために、「学びの履歴書」を作成する。「学びの履歴書」には、これまで学んできた文学的な文章や説明的な文章を通して身に付けてきた資質・能力が記されている。今回はまだ１年次のため、この単元で身に付けた資質・能力を「学びの履歴書」に記入し、自身に必要な力を自覚することができるようにしていきたい。

4 指導の内容と言語活動、教材との関わり

(1) 教材観

この作品は、人間関係のすれ違いや心の揺れを通して、変わってしまうことやうまくいかないことをどう受け止めて生きていくかを読者に問いかける物語である。「私」は、かつて親しかった友人である「夏実」との関係がうまくいかなくなる。「私」は勇気を出して「夏実」に声をかけるが避けられてしまい、すれ違いが修復されないまま物語は進む。その中で、「私」は思いが通じない痛みや誰かを知らず知らずに遠ざけていたことに向き合い、他者との関係や自分自身の心のあり方に少しずつ変化が生まれていく。

この作品に描かれる内容は、生徒にも身近な問題であり、生徒が自分自身と「私」を重ね合わせて読むことができる。自然や季節、光や香りについての描写を通じて、変わっていく関係や感情が丁寧に描かれており、場面や描写に着目して深く読むことができる作品である。例えば、「銀木犀」「星の花」については、場面を越えて、「夏実」との友情の象徴として登場する。最初は「お守りみたいな」花を、最後の場面では「ぱらぱらと」地面に落とす。また、「閉じ込められていた銀木犀の木」は、最後には「くぐって出ていく木」になる。また、「あたかも」「わけがわからない」という言葉の印象が変わり、「戸部君」という存在が「私」の中で受け入れられていくように描かれている。また、「サッカーボール」や「銀木犀の葉」についても、「私」の捉え方によって人間関係を示唆しているもののように読み取れる。他にも、視点の描写に着目することでも、視点の変化と心情の変化を重ねて読むことができる。場面と場面、場面と描写を結び付け、一つひとつの描写に着目することで、解釈が深まることを実感しやすい作品だと考える。

この作品を通して生徒は、登場人物の心の持ちようによって描写の意味が変わっていくことについて、自らの経験と重ねながら深く考えることができる。また、その意図について場面や描写に着目しながら細かな部分まで丁寧に読み深めることで、この先に読む文学的な文章の読解や読書活動にもつながっていくと考える。

(2) 言語活動設定の意図

本教材となる作品は、銀木犀の描写を通して、夏実との友情にこだわっていた「私」が成長する様子が描かれる。このテーマそのものも作品の魅力であるが、自然や季節、光に関する細かな描写、登場人物の心情を表す豊かな描写、場面によって解釈が多様になる描写も大きな魅力の一つである。さらに、作品のテーマに向かう文章の構成や展開も作品の魅力であると考えられる。これらの魅力に気付くことで、文学的な文章の一つの読み方を獲得することができる。

そこで、本単元では、作品の魅力に気付くために、初読の感想から問いを立て、それを解決する活動を行う。初読の感想は違和感、発見、疑問の三つの観点で記入し、そこに表れた内容を基にして生徒は問いを立てる。その上で、作品の魅力に迫るための問いとはどのようなものか、協働的に考える。その後、問いを解決する中で自分が見つけた作品の魅力を語り合うことで、自分の解釈の根拠を考えたり、他の読み手の解釈と比較したりすることができる。この活動を通して、主題、描写、文章の構成や展開に着目することができ、作品の読みを深めることにつながる。

(3)「自立した言葉の学び手」との関わり

本校の国語科として捉える「自立した言葉の学び手」の姿とは、言葉に対する問いを自ら立て、対話によって協働的にその解決をはかり、自らの言葉の認識を超えていく姿である。本単位においては、学級の仲間と協働し、自ら問いを立て作品の魅力に迫る活動を通して「自立した言葉の学び手」を育成したい。生徒自らが作品を読み深めていく中で、初読の感想では気が付かなかった作品の解釈に気付いたり、場面や描写を結び付けることで新たな意味付けがされることに自ら気付いたりする姿を期待する。

「自立した言葉の学び手」を育成するための方策として、生徒がどのように問いを解決していくかを見取る「学びの計画書」と、自らの学びを生かしていくための「学びの履歴書」の二つを取り入れていく。

「学びの計画書」には問いを解決するために生徒が必要だと考えた手立てを書き、それを基にしながら学習を進めていく。計画書にはこれまで学習した内容が書かれた「学びの履歴書」を参考にしながら、描写や構成に着目するような視点が盛り込まれるようにしたい。他の本を参考にしたり、必要に応じて他者と協働したりといった方法も考えられる。

計画書があることで、生徒は作品の魅力に迫るという方向性を見失わずに、主体的に考えていくことができる。また、必要に応じて教員や仲間に関いたり、本やインターネットで調べたり、生成 AI を活用したりするという見通しを立てることができる。教師はそのような方法が活用できる場を整えるとともに、計画書を見ることによって、生徒の考えの変遷を見取ったり、進行度に応じて助言が必要な生徒に気付いたりすることができる。

また、「学びの履歴書」を使うことで、これまでに「読むこと」において作品をどのように読み深めてきたのかを振り返ることができる。「星の花が降るころに」も「学びの履歴書」に書き加える中で、場面と場面、場面と描写を結び付けることについて生徒が新たな言葉の捉え方に気付くための学びにしていきたい。

この二つの活用が、自ら言葉に対する問いを立て、協働的に解決をしていく活動をより充実させると考える。「学びの計画書」に基づいて、自ら進んで協働的に問いを解決していくことで、自分の中になかった言葉の捉え方に気付く。それを「学びの履歴書」に記入し、その先の学習につなげていくという姿を、今回の「自立した言葉の学び手」の姿として見取りたい。

(4)意識させたい言語意識

【5つの言語意識】

相手意識	学級や学校の仲間に対して
目的意識	自分が見つけた作品の魅力を伝えるために
場面状況意識	協働的に問いを解決する場面で
方法意識	場面と場面、場面と描写などを結び付けて作品を解釈することを通して
評価意識	作品の解釈をもとに、作品のもつ魅力を捉えることができたか

5 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①比較や分類、関係付けなどの情報の整理の仕方、引用の仕方や出典の出し方について理解を深め、それらを使うことができる。(2)イ)	①「読むこと」において、目的に応じて必要な情報に着目して要約したり、場面と場面、場面と描写などを結び付けたりして、内容を解釈することができる。(C(1)ウ) ②「読むこと」において、文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考えることができる。(C(1)エ)	①描写に着目し、作品の魅力を粘り強く読み深めようとしている。

6 授業の計画

時	学習活動	指導上の留意点	評価
1	○本文を範読する。 ○グーグルフォームを使って、初読の感想(違和感・発見・疑問)を書く。内容はスプレッドシートで共有する。 ○初読の感想を読みながら、作品についての疑問を共有する。 ○共有したことから、問いを立てる。		
2	○1時間目の授業を振り返りながら、問いの立て方について確認する。 ○1時間目に立てた問いについて再考する。	○「自立した言葉の学び手」を育むためのステップ① 【問いを立てる】 ・「大人になれなかった弟たちに……」で立てた問いについて振り返る。 ・自身の考えや意見が必要になる問いを立てる。	[主体的に学習に取り組む態度①]

	○再考した問いを解決するための方法を「学びの計画書」に記入する。どのような問いについて考えているのかも記入するようにする。	○「自立した言葉の学び手」を育むためのステップ② 【学びの計画書の作成】 ・伝え合う活動に向けて、どのようなことが必要なかを学びの計画書に書かせる。 ・各自がどのような計画を立て、どのように進めているのかわかるように、「学びの計画書」をロイロノートで共有する。 ・問いを解決するために、必要な方法を考える。 ①教員や学級の仲間に聞く。 ②他の本や資料を読んで参考にする。 ③インターネットで調べたり、生成AIに意見を求めたりする。 ・①②③をいつでも活用できるように場を整え、生徒自身が立てた問いについて自分で考えていくことができるようにする。	
3	○「学びの計画書」に基づいて問いを解決していく。	○「自立した言葉の学び手」を育むためのステップ③ 【自己調整を行う】 ・「学びの計画書」や仲間の学習の進行状況を見ながら、自身の学びの調整を行う。 ・「学びの計画書」を再考する。 ・「学びの計画書」にはどの問いについて考えているのかを記入させる。随時確認し、助言を行う。	[主体的に学習に取り組む態度①] [思考・判断・表現①]

4	○「学びの計画書」に基づいて学習を進める。 ・どのような問いについて考え、どのような魅力を見つけたのか発表できるように準備を進める。 ○必要に応じて、対話による解決を行うようにする。教科書や本文、学級の仲間、教師、本、インターネット、生成 AI など、必要な方法を考える。	・「学びの計画書」を作成する段階で、問いを解決するために必要なこととして、協働的な学習の必要性を確認しておく。	[思考・判断・表現①]
5	○どのような問いについて考え、どのような魅力を見つけたかグループで発表し合う。 ○考えた問いと答え、作品の魅力を白い花の形の紙に書き、後日図書館に掲示する。 ○答えを共有した上で、自身の問いをもう一度見直す。これから文学的な文章を読むうえで生かせることを振り返り、「学びの履歴書」に記入する。	・場面と場面、場面と描写を結び付けてどういうことを見つけたのか、その結果どういふところが魅力だと考えたのかを伝えられるようにする。 ・掲示物は全校が見られる位置に掲示し、2年生や3年生から付箋でコメントを貰えるようにして、学年を越えて協働的な学習ができるようにする。 ○「自立した言葉の学び手」を育むためのステップ④ 【振り返って身に付ける】 ・場面と場面、場面と描写を結び付けることで内容の解釈が深まることを確認し、今後の「読むこと」に活用できるようにする。	[知識・技能①] [思考・判断・表現②]

7 本時の展開

(1) 日 時 令和7年10月29日(土) 9:45～10:35

(2) 場 所 山梨大学教育学部附属中学校

(3) 目 標 問いを解決しながら、作品の魅力を見つけよう。

(4) 展 開

(第4時【4/5時間目】)

	学習活動	指導上の留意点	評価
5分	○「学びの計画書」を見て、教師からのコメントを確認する。 ○「学びの計画書」に記載した内容から、この時間に必要な活動を考える。	・教師や学級の仲間、本やインターネット、生成 AI などとの対話を通して、他者の視点を取り入れるようにする。	
40分	○「学びの計画書」に基づいて学習を進める。 ・どのような問いについて考え、どのような魅力を見つけたのか発表できるように準備を進める。 ○必要に応じて、対話を通して考えを深められるようにする。		[思考・判断・表現①]
5分	○振り返りを記入する。	・発表に向けて、問いをどのように解決したか、どのような魅力を見つけたか記入する。	

8 評価方法及びCと判断する状況への手立て

問いを解決する活動から、生徒がどのように内容を解釈したのかを見取って評価する。「学びの計画書」や学習の様子を見ながら、Cと判断する状況の生徒に対して助言を行う。他の仲間の取り組み状況も共有し、参考にできるようにする。

9 参考・引用文献等

- ・文部科学省国立教育政策研究所『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校 国語』東洋館出版
- ・文部科学省『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編』東洋館出版